

第5章

客観的な根拠を重視した 教育政策（EBPM）の推進

- ・ 倉吉市教育委員会
- ・ 倉吉市立河北小学校
- ・ 倉吉市立上小鴨小学校

県教育委員会と倉吉市教育委員会が共同で行っている実証研究の取組を紹介します。



客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM[※]）の推進 【倉吉市教育委員会の取組】

とっとり学力・学習状況調査を実施して2年目を迎え、個人又は集団における学力レベルの伸びや非認知能力等の変化を見ることができるようになった。ここで得られたデータをエビデンス（客観的な根拠）として活用し、教育政策に生かすことで、よりよい教育実践ができると考えている。しかし、教育データの活用については、全国的にも選考事例が少ないため、倉吉市教育委員会と県教育委員会が、倉吉市内の学校のデータを基に共同で実証研究を行い、そこで得られた成果や好事例を倉吉市のみならず県内の学校に発信していくこととする。

EBPMを推進することで、次の3つのような効果を期待している。

- ①優れた教師の経験や勘、そして匠の指導技術を、言語化・可視化・定量化するなどして、若手教師に効率的・効果的に伝承することができる。
- ②データによるエビデンスと教員の経験や勘を融合し、より効果の高い教育実践が行うことができる。
- ③今まで良いとされている取組、常識だと思われる取組について、その効果を検証することで、エビデンスに基づいたスクラップアンドビルドを推し進めることができる。

この3つの視点を持ちながら、指導・支援の在り方の見直しや校内研究等の効果検証を行い、次年度以降の教育政策に生かすことで、この調査結果をエビデンスとした効果の高い教育を推進したいと考えている。

今年度、倉吉市教育委員会と県教育委員会、そして地方教育アドバイザーが一丸となって進めてきた実証研究について、今まで取り組んできたことや協議してきたこと、そして、得られた知見をまとめた。

※EBPM：Evidence、Based、Policy、Making の略称で、エビデンスに基づき、より実効性の高い政策を立案すること

1 研究推進の方法

- (1) 倉吉市教育委員会と県教育委員会で実証研究チームを構成する。
- (2) テーマを設定する。
- (3) とっとり学力・学習状況調査の調査結果を分析し、調査する学校、学級を選定する。
- (4) 学校を複数回訪問し、聞き取り調査を行う（1回30分程度）。
- (5) 調査内容をまとめる。
- (6) とっとり学力・学習状況調査報告書に調査結果を掲載して周知を図る。

2 研究のサポート

文部科学省地方教育アドバイザーから、データ分析の意義や方法、教育政策の検証等について指導・助言を受ける。

◇地方教育アドバイザー（以下、地教AD）

文部科学省高等教育局国立大学法人支援課企画官 大江 耕太郎 氏

文部科学省研究振興局参事官（情報担当）付企画係長 大井 康平 氏

3 学校の教育効果を図る視点

以下の3点に着目し、分析を進める。

- (1) 学力が伸びた児童生徒の割合・学力レベルの伸び
- (2) 自己効力感
- (3) 児童生徒の学力が伸びた学級の割合

4 令和4年度の分析チーム会議で挙げた研究テーマの内容

- ・どのような指導方法（校内研究）が児童生徒の学力を伸ばしたのか。
 - ・どのような資質・能力を備えた教師が成果を上げたのか。
 - ・児童生徒の「学力の伸び」の違いには、何が関係しているのか。
 - ・非認知能力・学習方略が高い学級は、担任が何に重点をおいて指導しているのか。
 - ・「学力の伸び」が大きい学校の校長は、どのような学校マネジメントを行っているか。
 - ・どのような教育施策が、学力向上に効果があるのか。
 - ・小学校のどのような指導が、中学校での伸びにつながるのか。
 - ・中学校において、どの学級も伸ばすための学年経営や学年主任の役割とはどのようなものか。
- ※このような視点をもって、推進チーム会議で協議し、学校訪問を行った。

5 具体的取組の記録

日にち	内容	参加者
5月20日（金）	地教ADとのキックオフの会 ・自己紹介 ・趣旨説明 ・地教ADによる講話	・市教委 ・県教委 ・地教AD（オンライン参加）
7月4日（月）	地教ADによる市教委及び学校訪問 ・倉吉市教育委員会への訪問 教育長との面談等 ・上灘小学校、河北中学校への訪問 校長面談、授業参観等	・市教委 ・県教委 ・地教AD
8月5日（金）	倉吉市小学校校長会におけるとっとり学力・学習状況調査の結果活用等についての説明	・県教委
9月2日（金）	倉吉市分析方法説明会（学校から1名参加）	・市教委 ・県教委
9月6日（火）	学校マネジメント研修（大江氏による講演会）	※全県対象
9月15日（木）	第1回倉吉市分析チーム会議 ・趣旨確認、情報共有 ・現状について意見交換等	・市教委 ・県教委 ・地教AD（オンライン参加）
9月16日（金）	第2回倉吉市分析チーム会議 ・分析の視点の協議 ・今後のスケジュールの確認等	・市教委 ・県教委 ・地教AD（オンライン参加）
9月29日（木）	第3回倉吉市分析チーム会議 ・全小・中学校訪問について等	・市教委 ・県教委 ・地教AD（オンライン参加）
10月14日（金）	第4回倉吉市分析チーム会議 ・とっとり学調の結果の分析の共有 ・全小・中学校訪問について等	・市教委 ・県教委 ・地教AD（オンライン参加）
10月17日（月）～ 11月4日（金）	全小・中学校訪問 ・学校におけるとっとり学調の活用方法や結果を生かした取組等についての聞き取り	・市教委 ・県教委
11月10日（木）	第5回倉吉市分析チーム会議 ・全小・中学校訪問の聞き取り内容の共有 ・今後のスケジュールの確認等	・市教委 ・県教委 ・地教AD（オンライン参加）

11月17日(木)	地教ADによる学校訪問 ・河北小学校、上小鴨小学校への訪問 授業参観、校長・研究主任等との面談等 第6回倉吉市分析チーム会議 ・情報共有、今後の取組に関する協議等	・市教委 ・県教委 ・地教AD
11月18日(金)	地教ADによる学校訪問 ・倉吉西中学校訪問、小鴨小学校への訪問 授業参観、校長との面談等	・市教委 ・県教委 ・地教AD
12月9日(金)	第1回学校訪問 ・好事例聞き取り	・県教委
1月20日(金)	第7回倉吉市分析チーム会議 ・来年度に向けて ・来年度に向けての聞き取りのための学校訪問について	・市教委 ・県教委
2月3日(金)～ 2月13日(月)	第2回学校訪問	・市教委 ・県教委
2月8日(水)	倉吉市中学校校長会におけるとっとり学力・学習状況調査の結果活用等についての説明	・県教委
2月9日(木)	地教ADによる学校訪問 ・倉吉西中学校への訪問 授業参観、校長等との面談等 第8回倉吉市分析チーム会議 ・聞き取り内容の確認 ・令和5年度の研究テーマの設定について	・市教委 ・県教委 ・地教AD
3月	第9回倉吉市分析チーム会議(予定)	・市教委 ・県教委 ・地教AD(オンライン参加)

6 成果と課題

(1) 成果

- 鳥取県教育委員会と倉吉市教育委員会がチームとなり、調査結果の分析や全小・中学校を訪問することで、課題を共有し、その対策について協議することができた。このように、定期的にチーム会議を設定して、学校の状況を感触だけではなく調査データをもとに協議することで、客観的に学校の状況を把握することができた。また、このことで直接学校訪問するなどの具体的な活動につながった。
- 小学校校長会において、とっとり学力・学習状況調査の作成に関わられた大江地教ADに、本調査の意図や活用について説明をしていただいた。また、小学校校長会夏季研修で、とっとり学力・学習状況調査の活用について研修をしていただいたことで、校長の調査に関する理解や学校マネジメントに活かそうとする意識が醸成された。
- 地教ADが倉吉市教育委員会や市立小・中学校を訪問することで、学校の実態を踏まえながら客観的な視点で助言を受けることができた。また、とっとり学力・学習状況調査と膨大な調査データについて、文部科学省地教ADの専門的な視点から分析していただき、児童生徒・学校の状況を把握することができた。

○小学校と中学校がそれぞれ持っているデータを共有し分析することで、中学校区の児童生徒がどのように学力レベルを伸ばしているか等、見ることができた。このように、小中連携を行うときの資料の1つとして共有することで、中学校区内の小中連携を充実させることができると考える。

◇データの分析から以下のことが明らかになった。

- ・「学力レベル」と「学力の伸び」をクロス分析すると、学力レベルが高くても学力の伸びが小さい児童生徒もいれば、学力レベルが高なくても大きく伸びている児童生徒もいる。学力レベルが高なくても、伸びている児童生徒に対してはプラスの声掛けにつなげることができ、学力レベルが高くても伸びが小さい児童生徒に対しては、伸びるための個別の支援につなげることができる。
- ・小学校4年から中学校1年までの学年ごとの学力が伸びた児童生徒の割合を比較すると、令和3年度は小学4年時での伸びた児童の割合が低い。
- ・小学校において学力レベルの高い児童は、中学校でも高い傾向にある等、小学校における学力レベル・学力の伸びと中学校における学力レベル・学力レベルの伸びはつながっている。

(2) 課題

○今年度は、学校訪問をして聞き取りを行うことで、学校の状況等について多くのデータを得ることができた。しかし、そのデータを有機的に結び付け、効果的な教育を行うためのノウハウを得るところまでには至っていない。来年度は、調査実施3年目で、学力レベルの伸びの変化がみられるようになる。この「伸び」の比較は、学校教育による効果を明確に分析できる。学校に還元できる分析を進めていくことが必要である。

○とっとり学力・学習状況調査の結果の活用について、学校の担当者や教科担当のみの取組とならないよう、また、校内研究の成果指標等に活用するよう、引き続き、周知を図る必要がある。

7 令和5年度の研究テーマ

【テーマ①】

小学校において、中学校でも学力を伸ばすための指導のポイントは何か。
(どのような指導が中学校で学力を伸ばし続けることにつながるか。)

【テーマ②】

中学校において、学力を伸ばす学級経営・学年経営のポイントは何か。※学年主任の役割
(どのような学級経営・学年経営が学力を伸ばし続けることにつながるか。)

集団が変わり一人一人が輝く特別活動 ～倉吉市立河北小学校～

1 とっとり学力・学習状況調査の状況

【主体的・対話的で深い学びの実施】 県平均を大きく上回る。

【学習方略】 すべての項目が県平均を大きく上回る。

【非認知能力】 自己効力感の伸びが顕著である。

2 効果があると考えられる取組

(1) 学級での取組

①学級づくりアンケートの実施

毎年4月、全学級において「こんな学級・学校になったら最高だ」と題し、学級づくりアンケートを実施している。そして、その結果をもとに「河北の力（めざす姿の指標）」を決めている。令和4年度は「①安心 ②伝え合い、よりよいものを生み出す ③自分から進んで動く ④まとまる」を指標として設定し、それが学級目標づくりや、学級力アンケート（学級の状態を見つめるアンケート）の指標としても反映される。

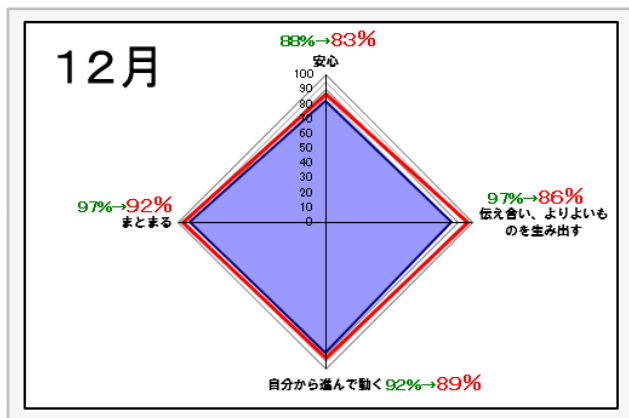
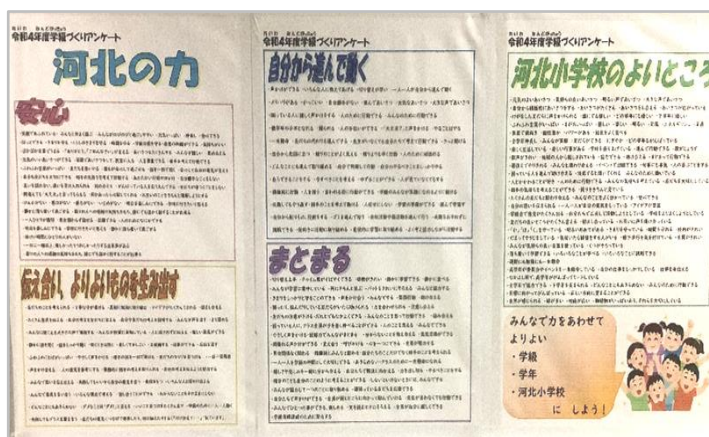
希望が膨らむ新年度スタートの時期を捉え、児童の思いや願いを大切に1年間の目指す姿を決定するプロセスに注力することは、児童の学校・学級生活における自主的、実践的な態度を引き出すことにつながる。このような取組が、自己効力感、学習方略の伸びにつながっていると考えられる。

②学級力アンケートと学級力会議の実施

「河北の力」の4つの視点「①安心 ②伝え合い、よりよいものを生み出す ③自分から進んで動く ④まとまる」について、それぞれの学級において児童がアンケートに回答し、その結果を学級の状態を表すレーダーチャート（学級力）として示す。

学級力会議では、そのデータを見ながら、学級の状態、今後の目標などについて、児童一人一人が思いを伝え合う。同じデータを見ながら思いを伝え合うことで、互いの理解も深まり、また、必然性と納得感のある今後の目標が定まることとなる。必然性と納得感は児童の意欲と行動を引き出す。すると、自ずと目標を達成する姿が増えることになる。

このような「自分たちで自分たちの生活を見つめ、自分たちで考え、決め、行動する」という一連の取組の中で自治力が育成される。それが、「自分は、それが実行できるという期待や自信」を表す「自己効力感」や各学習方略の高い値や伸びにもつながっていると考えられる。



(2) 学校全体での取組

①児童会活動の活性化

代表委員会をはじめ、各委員会の活動でも、課題に感じていること、思いや願いをもとにして今後の取組を話し合い、決定して実行する。代表委員会及び委員会活動の大きな柱は「学校をよりよくするために何ができるか」であり、創意工夫のある活動を目指して企画運営する。

創意工夫のある活動を目指すということは、児童のアイデアが取り上げられ、それが実現するということである。



②上学年集会、下学年集会の開催

学級力アンケートの結果から見えてきた課題の改善や児童の願いの実現をめざし、上学年（4～6年生）全員が参加する上学年集会、また、下学年（1～3年生）全員が参加する下学年集会を年に1回実施する。集会の内容については、事前に行う上学年会議、下学年会議にて話し合い、決定する。会議、集会ともに、上学年は6年生、下学年は3年生が、リーダーとして企画運営の中心となる。それ以外の学年も、自分たちにできることは何かを考え行動させることで、フォローとしての成長を促している。



③なかよし班別集会の開催

学校全体を3つの縦割グループ（色別のなかよし班）に分けて、それぞれのグループで集会を行う。6年生が主催し、なかよし班が今まで以上に仲良くなったり、まとまりのある班になったりできることをねらいとしている。全員が楽しめるように、6年生が中心となって内容やルールを決めたり、進行したりする。



どの取組においても、教師主導ではなく、児童の思いを出発点として取組を展開し、児童一人一人の思いや願いが実現する場面が多くある。学級会においても、各集会においても、事前活動、話し合い、事後活動の一連の取組が同様の流れで進められており、児童が学び方を様々な場面で活用させる姿が自然と生まれることになる。その中で児童は、友だちの意見を尊重し、自分の意見も伝えながら、合意形成を図っていく力を身につけていく。

これらの一連の取組が「課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかりとめるようになった」「グループやペアで、話し合ったり、意見や考えを出し合ったりして課題を解決した」等の「主体的・対話的で深い学びの実施」の高い値や、学習方略の伸びにつながったと考えられる。

根拠を基に、筋道を立てて考え、学びの楽しさを実感できる授業づくり【算数科校内研究の取組】 ～倉吉市立上小鴨小学校～

1 とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】算数の「学力を伸ばした児童の割合」「学力の伸び率」が県平均を大きく上回る。

【学習方略】プランニング方略、努力調整方略の伸びが顕著である。

2 効果があると考えられる取組

(1) 教師・児童それぞれが主体的に見通しをもって取り組むための工夫

①児童自らが学んでいけるための環境づくり

教室内の算数コーナーに、算数用語や押さえておきたいポイント、学習の足跡等を常に掲示している。それらに注目させ活用を促すことは、児童が自力解決や学び合いの時間に自ら考えや答えを導くための拠り所の一つとなることから、児童にとって教科書とノートが思考を深める拠り所となるような授業づくりを意識している。例えば、前時と本時の学習の違いを見つける際には、児童が自分のノートを確認することで違いを見出せるようにすることを大事にしている。

②ペア・グループでの学習の工夫

ノートに自分の考えをしっかりと書かせた上で、ペアやグループでの対話を取り入れ、児童が自分の考えを広げたり深めたりする活動を意図的に仕組んでいる。対話の際には、わからないことを伝えることで話合いの充実につなげること、わからない児童への一方的な教授にならないようにすること、座席配置に配慮すること等、児童の実態に応じた配慮も行われている。また、ホワイトボードやGoogle Jamboardを活用した対話の工夫も取り入れている。



ペアでノートを指し示しながら伝え合う姿。根拠を示して伝える力につながる。

③児童の考えや発言をつなげる発問の工夫

昨年度までの課題として「全体共有の場での児童の発表が、わかっている児童の発表会となっている」ということが挙げられた。全員の児童の思考を促すために、例えば「〇〇さんになったつもりでお互いに説明し合いましょう」「このあと、〇〇さんはどんなことを話すと思う？続きを考えてみよう」等の発問を重ねることで、全員参加による主体的な問題解決を目指している。研究主任を中心に、「説明3類型」を意識した算数の授業づくりの必要性についても周知され、それを具現化する授業を目指している。

④算数的価値をほめる授業づくり

教師が「何をほめるか」を明確にもって授業を行うことが大切である。児童の態度面ばかりをほめるのではなく、児童の言動の中で見られた算数的価値（問題の解決方法や着眼点の良さ、数学的な見方・考え方等）を具体的に評価することを大事にしていく。このことが、算数科への意欲付けにもつながる。また、授業中に「まねっこ問題」（疑似問題）を解く時間を確保することで、授業改善が図られた。

⑤家庭学習で次時の予習（昨年度の5年生での取組より）

家庭学習の一環として行っている自主学習（自学）において、週に複数回、継続的に算数の授業の予習を行った。児童各々が教科書を使って次時の内容を確認して、自学ノートに問題を解いたり、ポイントになりそうなところを考えてまとめたりした。児童自身が次時の見通しをもち、分からないことを明確にすることで、より自信をもって主体的に授業に臨めるようになった。

学校全体でも家庭学習の習慣化に力を入れ、児童自身が見通しをもちながら自ら学習に向かう習慣形成のために、右のようなカードを活用した取組も行っている。

上小鴨小学校 家庭学習がんばりカード

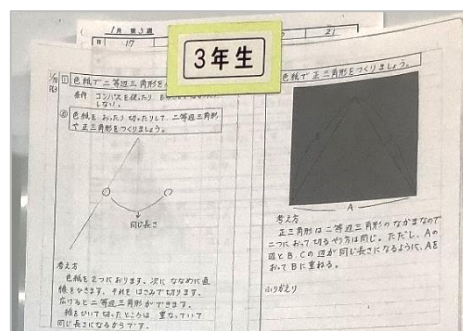
名前()

月	学習開始予定時間	(○、×)	月	学習開始予定時間	(○、×)
1	時 分		1	時 分	
2	時 分		2	時 分	
3	時 分		3	時 分	
4	時 分		4	時 分	
5	時 分		5	時 分	

【家庭学習チェック表（中高学年用）】 家庭学習の開始予定時刻を予め記入し、達成できたかどうかを児童自身が毎日チェックしていく。

⑥児童と同じノートを使った教材研究

職員室の週案黒板には、各授業者が児童用ノートを使って教材研究したもの（コピー）を毎週1回掲示し、全職員に共有した（右写真）。この取組を通して、単元を見通しながら、系統を意識した計画を立てることができるようになった。また、本時のめあてや指導すべきポイント等を教材研究用ノートに書き込むことで、児童目線に立って焦点化された授業づくりを行うことが意識付けられた。



職員全員が目にするため、他学年の学習内容を把握したり、授業について話したりする等のきっかけになる。

（2）基礎学力定着のための意図的な取組

①登校後の5分程度の「朝ドリル」

読解力を高める問題集に取り組んでいる。文章の読み取りに課題が見られていたことを受け、長文の読解力を日常的に高めていくことを目的としている。

②業間運動後の「ドリルタイム」

曜日によってメニューを変え、算数では、100マス計算等に取り組み、基本計算の習熟を図った。また、国語では、音読等の内容も取り入れ、実施した。

③帰りの会終了後の「さよならドリル」

帰りの会終了後、5分程度の短時間でできるドリルを学校全体で習慣化させた。この時間は、担任だけでなく全職員で指導にあたることで、担任をフォロー・バックアップする体制を整えた。担任だけでは見取れない児童の様子を把握することにもつながった。令和3年度の前半は終了した児童から下校していたが、後半は解き終えた児童がサポートに行く形にし、児童が説明したりわからないことを聞いたりできるようにした。このように、実態や状況を見ながら取組方も柔軟に考えた。

校内研究を軸としながら、以上のような取組を学校全体で日常的に積み重ねていったことが、算数の学力レベルの確実な伸びにつながっていると考える。また、日常の授業づくりや環境づくりにおいて、児童が主体的に見通しをもって学習に取り組んでいくための様々な工夫は、学び方の習得や学びに向かう力の涵養にもつながっていると考える。学校体制で行う基礎学力定着のための取組は、学力レベルを伸ばす土台づくりであり、児童が日々小さなことにもコツコツと取り組んでいく姿勢にもつながっていると考える。このような取組が、算数の学力レベルの向上をはじめ、プランニング方略や努力調整方略等の学習方略の育成にもつながっていると考えられる。